

論と、歴史の真理・事実の関連が問われる。歴史の知識の基礎として役立つ揺るぎない一連の事実が存在しないとしながらも、史的懷疑論を慎重に避けて、歴史の事実の特殊的性格が語られる。

第五章では歴史の客観性が問題となる。

歴史家の間の不一致は、(1)個人的偏見、(2)集団的偏見、(3)歴史解釈の理論の対立、(4)その底にある哲学(世界観)の対立から生じる。(1)と(2)は重大な障害ではなく十分懷疑である事によって免れ得るものだが、(3)と(4)は歴史家の観点であり、客観性にとって越え難い障壁をなす。ウォルシュは結論を保留しながら色々な観点を総合する可能性、ある観点を別の観点に包み込む可能性について述べる。

第六章から第八章までは思弁的歴史哲学が扱われる。具体的には第六章でカントとヘルダー、第七章でヘーゲル、第八章でコント、マルクス、トインビーが簡単に触れられる。歴史に計画やパターンを見出す企てに対して、歴史とは何の関係もないとか、形而上学的で非科学的だと批判するのは易しい。だが一般に我々は歴史に道理が具象化されているに違いないという期待や、歴

史には何らかの意味があるはずだという感じを多かれ少なかれ持っているので、このような企てが繰り返され、主題として存続しているとウォルシュは指摘している。

全体として、ウォルシュの論の進め方は、様々の対立する主張を織り込みながら、自分の主張を極力抑えつつそれらを批判・検討していき、ポイントに来れば歴史研究の実際に立ち戻って考えるという方法をとっている。それは入門書という性格もあるが、彼がオックスフォード派の言語分析の手法を駆使して歴史研究の実際から論点の整理を行っているからである。そのために、歴史家にとってその内容を身近なものにして

いるのが本書の何よりもの特長であろう。本書末には邦語文献、邦訳書を追加補充した親切的な「参考文献」と、簡便な紹介である「訳者あとがき」が付されている。訳は多少問題とする点があったが、全体的には内容に忠実で読み易い文章であった。

最後に「訳者あとがき」から。

「今ではもう歴史哲学は形而上学者の独占物ではなく、史学者にとって無縁のものではなくなっている。」是非乞御一読。

(四六判 二四二頁 一九七八年十二月)

創文社歴史学叢書 一八〇(円)
(芝井敦司 京都大学大学院生)

N・コーン著

江河 徹訳

『千年王国の追求』

原著者 N. Cohn, *The Pursuit of the Millennium: Revolutionary Millenarians and Mystical Anarchists of the Middle Ages*, Paladin 1970 である。初版は一九五七年に刊行された。翻訳の底本に用いられたのは、全体にわたって加筆修正された第三版である。原著はすでに、中世異端運動の系譜と眺望についての知識を得るのに手頃な概説書、入門書として、関連課題に携わる研究者の間で利用されてきた。

本書の対象は異端運動全般ではなく、千年王国運動に限定される。扱われる時代は八世紀から十六世紀に及ぶ。主な運動を列挙しておく。十字軍運動の影響を受けた諸『民衆十字軍』、偽ボドゥアン、偽フレデリック、意図せずして千年王国説の理論的支柱となったヨアキム、十三世紀以来、各国に出現した鞭打苦行運動、フランシスコ会

心霊派やベギン派の間にみいだされた自由心霊派、十四世紀イギリスの農民一揆、十五世紀チェコのタボル派、ドイツのニコラスハウゼンの鼓手、十六世紀ドイツのミュンツァーと再洗礼派、等である。なお、第三版によった本翻訳には付論として、十七世紀イギリスの自由心霊派ランターズが追加されている。

千年王国説は、色彩の濃淡の差こそあれ、いずれの宗教にもみいだされる思想であるが、キリスト教の場合には、それは終末論の一変型としてあらわれる。その構想のあらましを定式化すれば、最後の審判の前、終末のときにメシアが現われ、諸悪を追放し、地上にメシア王国「千年王国」を立てるのである、というものである。コーンは個々の千年王国説の思想内容、支持する社会層、運動の現実焦点をあてて、彼の基礎視角を要約すれば次のようである。まず、諸々の千年王国運動は「貧しい者」たちの運動である。それは彼らの様々な社会的意志表示の努力を典型的に代表するものではないが、ひとたびこの形をとった場合には、運動は容易に革命的な大動乱と化す可能性をもつ。なぜなら、この運動は特定の限ら

れた要求の実現によって完成されたとすることはできないからである。次に、千年王国運動は農村と都市の区別なく、組織の基盤を持たないアトム化された住民層の存在する地方に現われる。どのような境遇であれ、農村共同体やギルドのような伝統的社会組織が保たれ、そこに留まることができた人々は、その組織を通じて自分の不平を声に出し要求を訴えることができた。しかし、組織からはみだし、社会の末端部で生活している余剰の《根なし草》たちはその手段を持たなかった。かわりに、彼らは千年王国説の指導者「預言者」が自分たちを独自の集団として結束させてくれるのを期待し、運動に飛びこんでいった。以上の視角は納得のいくものである。

原資料からの引用を駆使しながら、上記の基礎視角に立つてストーリー・テリングしていく本書は、その限りでは、論旨は首尾一貫しており、大きな事実誤認もなく、秀逸である。しかしながら、もしそのような叙述形式を不服に感ずるならばきりがない。物語叙述をすぎて、読者が論点の整理に戸惑わねばならない場合があること、しばしば「社会学的にみると」と、運動とそ

の社会的背景との関係が語られるが、それがいかにも大まかな両概念のつきあわせであって、聊か不満が残ること、等である。特に、タボル派、ミュンツァー、再洗礼派を扱った諸章については、彼らに関して個別的に詳論した邦文文献がすでに数多いという事情を考えると、一層その感を強くする。いずれにせよ、このような感想ははじめに本書を「手頃な概説書、入門書」と呼んだ所以でもある。

訳文は読みやすく、とりたてて理解の困難な箇所もない。好訳であろう。原語と慣用の併用という原則に従った歴史用語、人名、地名等の表記も、大旨、首肯できる。ただ、ゲント（ガン）、ヘッセ（ヘッセン）、

ジョス・フリッツ（ヨス・フリッツ）等の表記、またチェコ系、オランダ系の無名人たちの表記は、訳者が英文学研究者であるせいか、いくらか英語寄りである。もちろん、後者の場合については、どのような表記を与えるかは、誰しも頭の痛いところであろう。

巻末に、原著にある参考文献表をそのまま転載してあるのは親切な配慮である。また、詳細な邦文索引がつけられている。

(四六判 四五六頁 一九七八年十一月
紀伊國屋書店 四〇〇〇円)
(永田諒一 岡山大学講師)

Derek Gregory,

Ideology, Science and Human Geography

デレク・グレゴリーは、ケンブリッジ大学の地理学講師であるとともに、シドニー・サセックス・コレッジのフェローである。本書における著者の意図は、従来の多くの研究が依拠してきた実証主義 (positivism) 的立場から批判的立場への転回にある。このような試みは、すでに若干の地理学者によって着手されているが、ここでは地理学を社会科学一般と結びつけ、そこでの論議を通じて地理学の本質の再検討をめざしたものである。

紹介
序説「自然諸科学における地位」では、地理学における自然主義偏重の伝統を指摘し、人間とその周囲の世界の関係に対する批判的理解になんら展望を与えない抽象的な諸命題に、多彩な人間経験を解消するこ

との危険を述べる。

第一部「地理学における実証主義…批判の諸要素」においては、まず基礎作業としてコントの所説に着目し、ついで地理学での実証主義、なかんずく論理実証主義の系譜を述べるとともに、その批判を哲学の成果を援用して詳細に展開する。そこでは、歴史的な特殊性を普遍的概念へ還元することに對して、強い不信任が表明されている。そして、批判的社会科学は、「構造的説明」「反省的説明」「実践的説明」の三つの説明様式を含まねばならない、とする。これらの説明様式の具体的な吟味が、第二部「地理学と批判的科学…代替的定式化」で行なわれる。

まず、直接的な経験の基底に潜む不変のものに基づく「構造的説明」の章では、レヴィ・ストロースの所論や、アルチュセールのマルクス主義的構造主義に言及する。そして、それらを空間的脈絡へ移し変えるさいの問題点を指摘する一方で、若干の研

究例も紹介している。
また、「反省的説明」の章においては、フッサールの学説を、地理学におけるライフワールド論との関連で述べる。そして、

主観的な志向性を客観的研究に結びつけるさいの問題点を論ずるとともに、地理学での「解釈」のもつ意味を掘り下げる。

さらに、「実践的説明」の章では、ホルクハイマーからハーバーマスへと続くフランクフルト学派に拠りつつ、現在の地理学の枠組を批判する。そして、理論と現実は、実践という課題を通じて結ばれ、両者はそれによって相互に豊かにされねばならない、と主張する。

以上が、内容の簡単な紹介である。本書の大きな意義は、「計量革命」後の地理学を支えた実証主義に対する明確な反論を通じて、地理学のオリエンテーションの多元化をめざすとともに、現在の社会科学一般にみられる批判的見解を導入することによって、七〇年代の新たな動向に哲学的な基礎を与えようとした点に、見い出せる。

(198 pp. 1978, Hutchinson, London)
(石川義孝 京都大学助手)